令和７年度

普及のあゆみ

令和８年３月　発行

はじめに

屋久島地域における農業改良普及事業の推進につきましては，日頃より農業者の皆様をはじめ，関係機関・団体の多大な御理解，御協力をいただき，厚く御礼申し上げます。

令和７年度は，台風や豪雨等の気象災害もなく比較的穏やかな１年となりましたが，生産資材や燃料，配合飼料等の高騰による生産量減少の影響で屋久島の農業・農村を取り巻く情勢は依然として厳しい状況にあります。

このようななか，子牛やお茶の市場価格が持ち直す兆しが見られ，明るい話題も出てきた年にもなりました。

さて，本県におきましては，「かごしま未来創造ビジョン」や「かごしまの食と農の県民条例に基づく基本方針」の実現に向け，戦略的な取組を展開しているところです。

これを踏まえ，屋久島事務所農林普及課農業普及係では，担い手農家や青年農業者，新規就農者の育成，屋久島の特色を生かした農産物の産地づくり等に取り組んできました。

特にさつまいも基腐病発生防止対策，ばれいしょの土づくり対策，果樹の若手農業者育成，有機茶等の生産性向上，肉用牛の町営牧場を中心とした基盤強化について重点的に取り組み，一定の成果を上げることができたと思っております。

本冊子は，このような本年度取り組んだ普及活動を掲載し，「普及のあゆみ」として取りまとめたもので，地域農業の振興及び地域農業を担う経営体や組織の育成に活用いただければ幸いです。

終わりに，実証・展示ほの設置等に御協力いただきました農業者の方々，普及指導活動を展開するにあたり御支援・御協力いただきました指導農業士をはじめ，普及指導協力委員，屋久島町，屋久島町農業委員会，種子屋久農業協同組合等関係機関・団体の皆様に，心より感謝申し上げます。

令和８年３月

屋久島事務所農林普及課

課長　　上村　光秋

目　　次

Ⅰ　普及活動事例

１　屋久島を支える担い手の育成（経営体・女性・地域計画）・・・・・・・1

２　屋久島を支える担い手の育成(青年・新規）・・・・・・・・・・・・・・5

３　サツマイモ基腐病等の被害軽減による産地維持・・・・・・・・・・・・7

４　屋久島の特性を生かした産地育成（総合）・・・・・・・・・・・・・・9

５　屋久島の特性を生かした産地育成（野菜）・・・・・・・・・・・・・・11

６　屋屋久島の特性を生かした産地育成（果樹）・・・・・・・・・・・・・13

７　屋屋久島の特性を生かした産地育成（茶）・・・・・・・・・・・・・・15

８　屋屋屋久島の特性を生かした産地育成（畜産）・・・・・・・・・・・・17

Ⅱ　実証・展示ほ等成績

１　(畑作)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

２　(果樹)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

Ⅲ　参考資料

１　令和７年の主要作物生育経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

２　令和７年の気象データ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

３　ミニ情報でつづるこの１年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

４　令和７年度各種表彰について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

５　令和７年度活動体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

Ⅰ　普及活動事例

課題名 屋久島農業を支える担い手農家の育成（経営体・女性・地域計画）

【成果の要約】
担い手支援体制の整備については，サポートチーム会を活性化し，認定農業者や新規就農者に対する具体的な支援策の検討や実践が計画的に行われている。
担い手の経営発展支援については，担い手確保・育成普及活動支援対象農家の中で，基本構想の目標所得確保へ向けた収益性向上や規模拡大への展開を行う生産者が増えている。法人化支援については，かごしま農業経営・就農支援センターと連携してスペシャリストを活用した伴走支援が展開できている。
担い手への農地集積と労働力確保に向けた活動支援については，地域にあった労働力確保システムづくりに向けた対応策を作成する上で必要な点を明確化した。

1 対象

認定農業者 60 戸，担い手確保・育成普及活動支援対象農家 10 戸，法人志向農家 1 戸，パソコン簿記記帳対象農家 45 戸，家族経営協定農家 22 戸，６次産業化志向農家２戸，女性農業経営士 13 戸，原ビジョン会議委員８名

2 課題を取り上げた理由

屋久島農業を維持・発展させるためには，認定農業者を中心とした担い手の確保と育成対策が不可欠である。その中でも，地域をけん引する担い手確保・育成普及活動支援対象農家に対して経営改善指導を行い，稼ぐ力のある魅力的な農業経営を確立する必要がある。また，年間を通じた所得の確保や経営の安定を図るため、６次産業化や複合経営の実践支援および検討を進めることが求められる。

経営改善研修会

モデル地区である原地区では，若手からベテラン生産者が集まり地域の将来について話合う「ビジョン会議」を開催しており，10 年後の営農ビジョン実現に向けた取り組みを自主的に行っているため，地域計画のモデル地区として積極的に支援する必要がある。原地区での成功事例を基に，他の地区の地域計画についても活動を進めていく必要がある。

経営個別相談

3 活動内容

（１） 担い手の経営安定支援

ア 担い手支援体制の整備

町アクションサポート会と連携し，担い手支援策の検討を行うとともに，認定農業者の経営安定に向けた経営改善計画の作成支援，研修会・経営相談の開催，新規就農者巡回指導による

技術・経営面のフォローアップ指導など計画の実践支援を実施した。

イ　担い手の経営発展支援

担い手確保・育成普及活動支援対象農家 10 戸に対し,目標所得と経営計画の達成に向けた経営および生産技術の改善支援を行った。

法人志向農家である畜産農家への法人設立に向けた支援として，かごしま農業経営・就農支援センターと連携し，スペシャリスト（税理士）派遣により法人化の進め方についての支援を実施した。

農業者の経営管理能力向上のため，パソコン簿記基礎講座から，応用研修（入力会），決算研修と年間を通して活動を行った。

「屋久島アグリネット」決算指導会

認定農業者等の経営発展のため補助事業活用希望者などに資金計画作成支援，家族経営協定推進を行った。

さらに，女性リーダー育成にも取り組んだ。

（２）　担い手への農地集積と労働力確保に向けた活動支援（モデル地区活動支援）

マッチングアプリ「デイワーク」を活用した雇用確保，また労働力確保対策，体制(案)の作成を検討した。

農業法人化の伴走型支援

４ 活動の成果

（１）担い手の経営安定支援

ア　担い手支援体制の整備

サポートチーム会を活性化し，認定農業者や新規就農者に対する具体的な支援策の検討や実践が計画的に行われている。

① 認定農業者の確保については，〇戸が再認定された。

② かごしま農業経営・就農支援センターやかごしまよろずのスペシャリストを活用することで，売上・販路拡大（ブランディング，パッケージ刷新，オンライン販売）への意識高揚に繋げた。

③ 新規就農者巡回指導で，現地の状況を直接確認し、新規就農者個々のレベルに応じた改善を助言した。

イ　担い手の経営発展支援

担い手確保・育成普及活動支援対象農家の中で，基本構想の目標所得確保へ向けた収益性向上や規模拡大への展開を行う生産者が増えている。法人化支援については，かごしま農業経営・就農支援センターと連携してスペシャリストを活用した伴走支援が展開できている。

① 担い手確保・育成普及活動支援対象農家 10 戸に対し，技術支援や経営分析など継続的に支援の結果，生産技術の向上や規模拡大等の成果が得られ，経営費の高騰や価格低迷等の影響はあったものの，町基本構想となる所得について 10 戸のうち〇戸が達成した。

② 法人志向の畜産農家１戸に対しかごしま農業経営・就農支援センターを活用した支援の結果，経営継承及び経営の多角化を視野に入れた法人化の進め方について整理ができた。
③ 経営管理能力の向上を図るため，パソコンを活用した複式簿記に取り組む新規就農者対し，制度資金の相談活動，計画作成支援を行い，貸付実行に至った。

（２）担い手への農地集積と労働力確保に向けた活動支援（モデル地区活動支援）
島内全域でのマッチングアプリの周知啓発が不十分であったことから「デイワーク」のマッチング機能がうまく発揮できず，雇用確保には至らなかったが，地域にあった労働力確保システムづくりに向けた対応策を作成する上で必要な点を明確化した。

ビジョン会議の様子

５ 今後の課題

（１）　担い手の経営安定支援
ア　担い手支援体制の整備
認定農業者の確保については，認定新規就農者から認定農業者への経営発展支援を行う。また，関係機関で連携しアクションサポートチーム会による支援体制の強化を図っていく。
イ　担い手の経営発展支援
過去の経営評価を踏まえ，モデル経営の新たな選定と，稼ぐ力向上のための経営改善目標の達成に向けた経営・技術を継続支援する。

（２）担い手への農地集積と労働力確保に向けた活動支援（モデル地区活動支援）
多くの取組事例にあるように地域の関係機関・団体と連携した広域的な取組と地域の実情を踏まえた対応策の作成が必要である。

６ 担当した普及職員（〇はチーフ）

樋口，新川，〇江口，佐藤

課題名　屋久島を支える担い手の育成（新規・青年）

【成果の要約】
今年度プロジェクト活動を行った青年農業者は、経営継承や新規品目栽培、機械導入による省力化などに積極的に取り組む姿勢が見られ、これからの屋久島の農業の担い手として活躍が期待できる人材となってきている。新規就農者支援については、係全体で協力して取り組むことによって専門的かつスムーズな支援を行うことができた。

１ 対象
屋久島農業青年クラブ９名、新規就農者 25 名

２ 課題を取り上げた理由
担い手農家の高齢化が進む中、数少ない青年農業者には地域の農業を牽引することが望まれ、プロジェクト活動や組織活動を通して生産・経営管理技術や資質向上が必須である。また、高齢化等により農家の減少が予測される中、次世代を担う新規就農者の確保と育成は必須であり、就農相談の段階から営農定着・発展まで、関係機関と連携した円滑な支援が必要である。

３ 活動内容
(1) 青年農業者・新規就農者の確保・育成

ア プロジェクト活動を通した生産・経営管理技術向上支援

果樹部門では共同プロジェクトで「ピタヤ栽培への挑戦」、野菜部門では「ばれいしょ栽培における基肥の比較試験」のプロジェクト活動支援を行った。地区青年農業者会議では２人が発表し、指導農業士を含めて多くの質問が出された。また、同日に屋久島農業青年クラブの総会が開催された。

地区青年農業者会議での発表

ピタヤの共同プロジェクト作業

イ 新規就農者受け入れ、支援体制の整備

新規就農者それぞれの経営・技術の課題把握のため、関係機関と巡回指導を行った。新規就農者励ましの会や基礎研修会、現地就農トレーナーと連携した部門別研修会を開催し、新規就農者の定着を支援した。また、新規就農者の「かごしまの農林水産物認証制度（新基準）」の取得を支援した。

４ 活動の成果

⑴ 青年農業者・新規就農者の確保・育成

ア プロジェクト活動を通した生産・経営管理技術向上支援

プロジェクト活動計画について、２名が地区青年農業者会議で発表した。各プロジェクトについて、指導農業士や青年農業者、関係機関との意見交換を行い、活動の参考とした。本年度は１戸の野菜部門の青年農業者が青年農業士に認定された。

現地就農トレーナー研修（左：野菜　右：果樹）

青年農業士の認定交付式

ヤマイモの乾燥対策

イ 新規就農者受け入れ・支援体制の整備

就農希望相談時には、現状と目標とのギャップをしっかりと理解してもらうとともに、計画性のない就農・無理な資金援助は行わないよう判断基準を明確化した。関係機関と連携して就農相談を行い、品目担当者も交えて話をすることで、計画の作成や農業経営の難しさを理解してもらうことができた。

５ 今後の課題

⑴ 青年農業者のプロジェクト活動の実践支援

⑵ 新規就農者の個別課題解決支援

６ 担当した普及職員（〇はチーフ）

樋口、〇玉利、佐藤

課題名　サツマイモ基腐病等の被害軽減による産地維持

【成果の要約】
サツマイモ基腐病等の対策として，関係機関及び酒造会社とのサツマイモほ場定期巡回や情報交換会の開催，栽培品種の検討・生分解マルチ栽培実証などを行った。
今年度は，定植時期の乾燥やコガネセンガンの試験導入によって単収は低下したが，サツマイモ生産に対する支援体制は強化された。

１ 対象

島内酒造会社（三岳酒造，本坊酒造）
焼酎用サツマイモ生産者８戸　（重点対象農家８戸）

２ 課題を取り上げた理由

屋久島地域には酒造会社が「三岳酒造」と「本坊酒造」の２社存在し，焼酎用サツマイモは島内で生産・加工・販売が可能な品目として農業経営を支えている。

しかし，サツマイモ基腐病・その他腐敗病の発生や地力の不足，生産者と酒造会社の連携不足によって単収は低下傾向にあった。そのため，病害虫対策や土づくりの推進・情報交換会の開催等によって単収の向上や関係性構築を行う必要があった。

３ 活動内容

⑴ サツマイモ基腐病 PT 活動強化

サツマイモ基腐病の発生割合の低下や焼酎の品質向上のために，コガネセンガンの試験栽培を行った。また，三岳酒造の関係者とのほ場同行を昨年度から継続で行った。令和７年度は三岳酒造にて収穫前の「目揃い会」も開催し，サツマイモの品質向上を目指した。

⑵ サツマイモ生産安定支援

土壌分析結果を基に，堆肥や石灰資材の施用を推進した。また，生産者から「マルチ撤去の作業が非常に重労働である」という意見があったことから，生分解マルチの試験栽培実証を行った。

４ 活動の成果

⑴ サツマイモ基腐病 PT の活動強化

コガネセンガンを定植したほ場のすべてでサツマイモ基腐病の発生•蔓延が確認された。ここ数年，サツマイモの栽培を行っていなかったほ場でも発生が見られたこともあり，コガネセンガンはサツマイモ基腐病に対して非常に弱いことが再確認された。このことから，三岳酒造・本坊酒造共に屋久島島内の生産では抵抗性品種「みちしずく」や「ジョイホワイト」の生産を主軸として行う方針を改めて決定した。

三岳酒造の「目揃い会」では加工時間の短縮や焼酎の品質向上のため，腐敗イモや虫食いイモの出荷をできるだけ避けるように加工担当者から生産者へ依頼があった。今後もほ場同行巡回や出荷前の「目揃い会」は継続させ，生産者との連携・出荷サツマイモの品質向上を目指す。

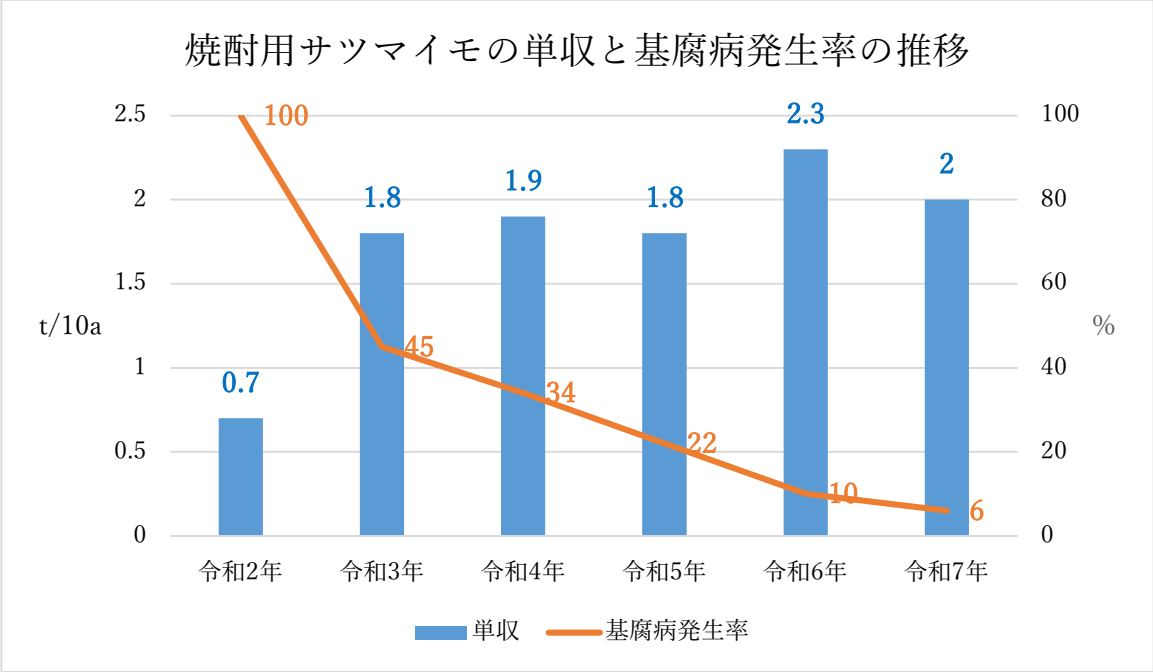
サツマイモ目揃い会の様子

(2) サツマイモ生産安定支援

土壌診断の結果，屋久島の畑は腐植と石灰が基準値よりかなり低い値であることが分かっている。施肥設計の結果，島内の畜産農家と連携し牛ふん堆肥の施用した生産者は５戸となり，石灰資材を施用した生産者は３戸となった。

生分解マルチ（あいさいマルチ　0.017*120*400）で栽培したサツマイモは，通常のビニールマルチで栽培したサツマイモと比べて病害虫の発生や単収に差はなく，収穫作業も問題なく行うことができた。このことから，生分解マルチでも焼酎用サツマイモは生産ができ，省力化も可能ということが分かった。

しかし，生分解マルチはビニールマルチに比べて価格が 2.5～3 倍程度の差があることが導入におけるボトルネックになっている。そこで，生分解マルチの購入補助事業を町単で設置する計画を立案予定である。



※令和７年度の基腐病発生ほ場は「コガネセンガン」栽培区のみ

５ 今後の課題

(1)焼酎用サツマイモ単収・品質向上対策（土づくり・病害虫対策・目揃い会の継続等）

(2)栽培省力化技術の導入（生分解マルチ導入）

６ 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇佐藤

課題名 未来につなぐ屋久島農畜産業の育成

【成果の要約】
果樹新規就農者に対する現地トレーナー研修や経営計画実践支援により、若手生産者の定着と経営改善が進展した。特に、本年植栽予定者 4 名が研修に参加し、計画的な産地参入体制が構築された。あわせて、バレイショ跡地を活用した耕畜連携による粗飼料生産は 6.0ha に拡大し、2 回収穫体系の確立により飼料基盤の強化が図られた。有機茶の栽培面積拡大と黒豚由来堆肥の実証により地域内資源循環型農業が前進したほか、ドローン防除や畜産 ICT の導入により省力化と繁殖成績向上が実現した。さらに「屋久島牛」のふるさと納税出品開始やクルーズ船での茶販売を通じ、生産から販売までを結ぶ島内一貫型ブランドモデルの構築が進展した。

1 対象

果樹新規就農者 11 戸，バレイショ生産者 23 戸，畜産経営体 18 戸，有機茶生産者 7 戸，肉用牛法人 1 戸，養豚法人 1 戸，仕上茶生産者 9 戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島農業は、多雨・急傾斜地という地理的制約と生産者の高齢化が進行する中で、持続可能な産地構造への転換が求められている。特に、果樹分野では次世代担い手の育成と計画的参入支援が不可欠であり、畜産分野では粗飼料の島内生産拡大による経営安定化が急務である。また、付加価値向上のためには有機転換やスマート農業の導入、ブランド化による販路拡大を一体的に進める必要があった。

3 活動内容

（1）果樹新規就農者の育成支援

現地トレーナー研修および栽培講習会を開催し、植栽前段階から技術指導を実施した。経営計画策定支援を行い、計画的な産地参入体制の構築を図った。

（2）耕畜連携による粗飼料体系の構築

バレイショ跡地を活用した夏作粗飼料の 2 回収穫体系を推進し、作付面積を拡大。堆肥供給計画の調整と散布指導を実施し、地域内循環型生産体系の定着を図った。

（3）有機・環境調和型農業の推進

有機 JAS 転換支援、栽培管理指導、紅茶求評会を実施。黒豚ファーム縦型コンポスト堆肥の実証ほ設置により、養豚由来堆肥の農地還元モデルを構築した。

（4）スマート農業の実装

バレイショ疫病防除におけるドローン委託防除体制を構築。畜産法人では発情検知 ICT を活用し、繁殖管理の効率化を支援した。

（5）ブランド化と販路拡大

屋久島牛のふるさと納税出品支援を行い販売を開始。屋久島高校と連携し、クルーズ船における茶販売を実施し、PR と販路拡大を図った。

４ 活動の成果

（１）果樹新規就農者の育成

植栽予定の新規就農者４名が現地研修に参加し、技術習得段階からの支援体制が整　備された。若手３戸で経営改善の具体的取組が進展し、計画的な産地参入基盤が形成された。

（２）耕畜連携の確立

粗飼料作付面積は計画 2.5ha を大きく上回る 6.0ha に拡大し、２回収穫体系を確立。夏場の安定供給体制が整い、地域内飼料基盤の強化につながった。

（３）有機・環境調和型農業の推進

有機茶面積が増加傾向にあり、紅茶求評会の実施により品質向上意識が高まった。黒豚堆肥の実証により、地域内資源循環型農業の具体的モデルが形成された。

（４）スマート農業の導入

ドローン防除の利用者および対象面積が拡大し、省力防除体系の導入が進展した。畜産 ICT 活用により発情判断精度が向上し、繁殖管理の効率化が図られた。

（５）ブランド化の前進　屋久島牛のふるさと納税出品が開始され、島内一貫型ブランドモデルが具体化した。クルーズ船販売の継続により販路拡大への意識が高まり、６ 次化の取組が前進した。

５ 今後の課題

（１）果樹新規就農者の継続支援と新たな担い手確保
（２）耕畜連携面積拡大と島内畜産由来たい肥活用の推進
（３）有機・環境調和型農業の深化と有機 JAS 転換の加速
（４）スマート農業の費用対効果検証と省力化体系の確立
（５）屋久島牛販売データの分析とブランド戦略深化，他品目への波及

６ 担当した普及職員（〇はチーフ）

樋口，〇新川，玉利、佐藤

課題名　未来につなぐ屋久島畜産業産地の育成（野菜）

【成果の要約】
バレイショの収量向上のため，土壌診断に基づく「土づくり」・ドローン委託防除の推進・シストセンチュウ抵抗性品種「しまあかり」の推進・バレイショ収穫機械の検討などを行った。その結果，堆肥を活用した生産者は８戸，ドローン防除を行った生産者は６戸，しまあかりを栽培した生産者は８戸となった。

１ 対象

JA 種子屋久　バレイショ生産者　22 戸

２ 課題を取り上げた理由

屋久島のバレイショは畑作の重点品目であるが，地力や防除の不足によって単収が低く安定しないことが課題である。そこで，島内牛ふん堆肥の施用やドローン委託防除の推進を行い，単収向上を図る。また，高齢化対策や新規就農者支援の一環としてバレイショ収穫機械の検討を行う必要がある。

３ 活動内容

⑴ 土壌診断に基づく施肥提案

令和５年～7 年の土壌分析の結果，屋久島の土壌は腐植と石灰が不足していることが分かっている。そこで，休閑期（4 月～9 月）に島内の畜産農家に畑を貸し，バレイショ栽培前に牧草残渣と牛ふん堆肥をすき込んで返却することで堆肥の施用推進を図った。

⑵ ドローン委託防除の推進

疫病向けの予防散布・適期防除としてドローン委託防除を推進した。年内に１回，年明けに１回の合計２回のドローン散布を行った。散布した農薬は，リライアブルフロアブル（1 回目）とランマンフロアブル（2 回目）とした。

⑶ シストセンチュウ抵抗性品種「しまあかり」の推進

種場産地である北海道ではシストセンチュウ被害が拡大しており，既存品種「ニシユタカ」の種いも供給が不安定になっている。そこで，県内ではリスクマネジメントの一環として抵抗性品種「しまあかり」の導入を推進している。屋久島地域においても今後の産地維持のために，現地栽培・販売等に先行して取り組んだ。

⑷ バレイショ収穫機械の試験導入

バレイショの収穫作業は機械化が進んでおらず重労働であることから，労働力不足対策や新規就農者支援として収穫機械の導入を検討した。昨年度に試験運用を行った「ブルガール」は機械が大型であることから，トラックを所持している生産者が少ない屋久島ではほ場への移動が困難であることがわかった。そこで，今年度は軽トラックにも積載可能な「GSA600」の試験運用を行った。

４ 活動の成果

⑴ 土壌診断に基づく施肥提案

令和７年度は堆肥を施用した生産者は８戸と，石灰資材を施用した生産者は４戸となった。また，耕畜連携の取組みに協力した生産者は６戸で面積は 6ha となった。生産者の「土づくり」に対する意識は変わりつつある。

⑵ ドローン委託防除の推進

ドローン委託防除を一度経験した生産者は継続して依頼を申し込んでいるが，今年度は新たに新規生産者 3 戸から依頼があった。ドローン防除に取り組んだ生産者は合計 6 戸で延べ面積は 15ha となった。防除に対する生産者の意識は若手生産者を中心に変わりつつある。

⑶ シストセンチュウ抵抗性品種「しまあかり」の推進

今年度は 10a 規模で「しまあかり」の栽培を８戸の生産者で行ってもらった。栽培したほ場には立て看板を設置し，地域の生産者が自由に観察できるようにした。また，JA で「しまあかり」として今年度から正式に出荷し，市場での反応を確認する予定である。

⑷ バレイショ収穫機械の試験導入

９月の農協機械展示会にて先行して「GSA600」の機械紹介とデモ運転を行った結果，多くの生産者が興味を持っていることがわかった。テニスボールをバレイショに見立てて収穫作業を行った結果，屋久島の栽培条件でも正常に稼働することが分かっている。

５ 今後の課題

⑴「土づくり」の推進（耕畜連携を含めた牛ふん堆肥の施用）
⑵ドローン防除面積拡大
⑶「しまあかり」の栽培面積拡大
⑷「GSA600」の導入計画の作成

６ 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇佐藤

課題名　屋久島の特性を活かした果樹産地育成

【成果の要約】
・たんかんの摘果は、樹齢や樹勢に応じて着果量を調整することが必要である。
・ぽんかん「KP-2」は、従来品種より１度程度糖度が低い。
・パッションフルーツは、吊り上げ式仕立法で単収４ｔを達成した。
・ピタヤの整枝法、施肥方法を検討した。

１ 対象

果樹栽培農家 550 戸、JA 果樹部会 160 戸、JA パッションフルーツ部会 50 戸

２ 課題を取り上げた理由

屋久島では、たんかん、ぽんかん等のカンキツ類やパッションフルーツ等の果樹栽培が盛んである。その一方で、たんかんでは隔年結果、ぽんかんでは着色遅延、パッションフルーツでは単収向上などが課題となっている。

３ 活動内容

⑴たんかんの連年安定生産技術の波及

令和６年度に適正着果量 18 果/㎡をベースに摘果モデル樹を６カ所（永田、小島、尾之間、原、麦生、高平）に設置し、本年はそれぞれの樹の着果状況等を調査した。

高齢化した樹の更新のため苗木の新植が進んでいるが、幼木管理の技術向上のために、若手生産者を中心に苗木育成研修会を実施した。

⑵ぽんかんの品質向上技術の波及

秋季以降の高温による着色遅延の対策として、着色促進効果のあるエスレル散布を検討したが、本年は実証を中止した。かわりに「KP-2」の果実品質の推移等を調査した。

⑶熱帯果樹の生産体制確立

パッションフルーツでは単収向上のため、つり上げ式の整枝を行い目標単収を達成した。ピタヤは希少フルーツ事業を活用して整枝法や施肥方法などを検討した。

４ 活動の成果

⑴ たんかんの連年安定生産技術の波及

令和６年度に実施した摘果モデル樹の本年の着果状況は、概ね良好である樹が３カ所、少ない樹が３樹という結果であった。良好な樹でも春先の段階で落葉が進んだ樹もあり、翌年の結果母枝となる春枝だの発生が少なく、次年産では着果が少ない状況である。

着果量はベースを 18 果/㎡とすることで『たんかんの摘果マニュアル』でも記載し

ているが、樹齢や樹勢に応じた着果量に調整する必要がある。ただし、幼木時に極端に着果させるとカラタチ台では、黄化落葉症を発生させる恐れがあるので注意が必要である。半強勢台木では樹勢が強く花が安定しないので、カラタチ台よりも早い時期から着果させる必要がある。

高齢樹などでは幼木への更新が進みつつあるが、育成技術がまだ低いので講習会を開催した。今後は屋久島町尾之間試験園のほ場を活用して、幼木管理の展示を行っていく計画である。

苗木育成研修会（11 月 4 日）

⑵ ぽんかんの品質向上技術の波及

ぽんかん「KP-2」の糖度が低いことが課題の一つとなっており、実態を調査した。「吉田」や「薩州」と比較すると、着色は早いものの糖度は１度以上低くかった。

⑶ 熱帯果樹の生産体制確立

ピタヤの果実品質評価会(9 月 17 日)

大崎町の農家が開発した吊り上げ式の仕立方を実践した農家は、出荷できなかった規格外果実を含めて単収４ｔを達成した。しかし、ほかの農家の単収は低く、今後も引き続き単収向上の取組が必要である。

ピタヤは ACCY（果樹青年組織）が中心となり実証を行っており、その成果は青年農業者会議で発表した。

５ 今後の課題

⑴ たんかんの連年安定生産技術の波及

摘果技術の向上、低樹高化、省力栽培、半強勢台木の栽培方法の検討など

⑵ ぽんかんの品質向上技術の波及

「薩州」の着色促進技術の検討，「KP-2」の糖度上昇

⑶熱帯果樹の生産体制確立

パッションフルーツの単収向上

６ 担当した普及職員（〇はチーフ）　〇玉利

課題名　未来につなぐ屋久島農畜産業産地の育成（茶）

【成果の要約】
・持続的な茶産地を育成するために，樹勢の弱い茶園は深刈り更新指導や荒茶求評会の開催など栽培・加工の基礎技術を支援
・かん水により，秋芽生育の充実が図れ，次年産の一番茶の品質向上が期待

１ 対象

屋久島茶業振興会　１４戸

２ 課題を取り上げた理由

屋久島町の茶生産者は，有機栽培農家が半数を占め，県茶市場出荷に加え，小売販売が多く，経営を安定させるためには栽培・加工の基礎技術習得及び販路確保が必要不可欠である。

また，近年の茶市場価格の低迷を受け，茶市場における競争力の強化と多種多様な茶種の生産による市場外の相対取引先の確保が必要となっている。畑地かんがいの通水した茶園も広がっており，水利用法の周知も求められつつある。

そのため，農業者の栽培・加工の基礎技術向上，「屋久島茶」のＰＲ活動，畑地かんがい水の多目的利用の支援を行った。

３ 活動内容

(1)栽培・加工技術向上支援

樹勢の弱い茶園が多く見られ，生葉収量が少ない茶園が目立った。そこで，次年産一番茶の品質向上を目的とし，樹勢回復を図るために，深刈更新指導や秋整枝検討会を開催した。

検討会では，更新や整枝の意義や，時期・位置などについて指導した。現地では生産者が納得できるよう説明し，実演した。生産者が深刈更新や秋整枝の重要性を再認識する良い機会となった。

５月には，３年ぶりに一番茶荒茶求評会を開催し，茶業振興会員及び関係機関 11 名で荒茶の評価を行った。求評した荒茶の茶種は煎茶や釜炒り茶 19 点で，うち９点は有機茶であった。品質は，休眠がしっかりと確保でき，凍霜害等の被害もなくうま味があり良好であった。栽培管理や製造法，品質について互いに討論，アドバイスをするなど有意義な求評会となった。来年の一番茶の品質向上を期待する。また，８月には近年生産が拡大している紅茶・半発酵茶の研修会を開催した。本町の紅茶は萎凋・発酵程度も良好で，県茶市場で茶商からの評価も高く高値で推移

秋整枝検討会で整枝位置を検討

荒茶求評会で品質の討論

した。小売り販売でも消費者から好評である。

⑵「屋久島茶」のＰＲ支援

昨年作成した「屋久島茶」のパンフレットを各種イベントで配布し，「屋久島茶」の認知度向上を図った。

今年は，博多駅，アミュプラザ広場，島内では屋久島高校の生徒と連携してクルーズ船，安房港などで「屋久島茶」の PR および販売を行った。

また，屋久島町と協力して作成した屋久島茶のプロモーション動画が公開され，このビデオが多くの消費者に視聴され，「屋久島茶」の認知度向上につながることを期待する。

「屋久島茶」の PR 支援

⑶畑かん水の多目的利用支援

令和７年８月～10 月に畑地かんがい用スプリンクラーを活用し、最終摘採後の秋芽充実度を実証した。更新園の乾燥時にスプリンクラー散水を行った区と秋芽の生育状況及び秋冬番茶の収量等を比較した。

かん水区は秋芽が充実し，秋整枝量も約 1.6 倍と多く，次年産一番茶の葉層が確保された。

スプリンクラー散水

４ 活動の成果

⑴栽培・加工技術向上支援

生産者の茶園づくりに対する意識が高まった。一番茶荒茶求評会や紅茶・半発酵茶の研修会を開催することにより他生産者の製造技術を共有できた。

⑵「屋久島茶」のＰＲ支援

「屋久島茶」のパンフレットを各種イベントで配布するとともに，「屋久島茶」のプロモーション動画公開により認知度向上が図られた。

⑶畑かん水の多目的利用支援

かん水区は秋芽が充実し，秋整枝量も約 1.6 倍と多く，次年産一番茶の葉層が確保された。

５ 今後の課題

⑴栽培技術向上による収量増

⑵消費者ニーズに対応した多種多様な茶づくり

６ 担当した普及職員（〇はチーフ）

〇樋口

課題名　屋久島の特性を活かした肉用牛産地づくり

【成果の要約】
生産者の高齢化に伴い繁殖牛頭数は減少したが，不妊牛の計画的な淘汰・更新により繁殖構造の健全化と経営の効率化が進んだ。DX タグによる発情検知やファームノートクラウドを活用した群管理により繁殖成績は向上し，島全体の分娩間隔は 383 日と前年から 4 日短縮し，全国和牛登録協会主催の繁殖成績の部で二年連続全国トップ 15 団体に選出された。一方，疾病や下痢の影響により子牛の発育成績は低下したが，課題が明確となった。また，令和 7 年 5 月には屋久島牛の初出荷を実現し，町と連携した農畜産物 PR 動画は 37 万回を超える再生数を記録し，屋久島牛の認知度向上に寄与した。

1 対象

屋久島町和牛振興会 22 戸

2 課題を取り上げた理由

屋久島における肉用牛生産は、農業生産額で主要な品目の一つであり、地域農業を支える基幹作目である。しかし、生産者の高齢化が進行しており、生産基盤の維持が大きな課題となっている。また、離島という地理的条件から、飼料や生産資材のコストが高く、多雨の気候条件により粗飼料の生産・調整が難しい状況にある。さらに、労働力不足や経営環境の変化への対応も求められている。このような中，屋久島子牛の産地継続と収益性が高く魅力ある肉用牛経営の実現に向け，繁殖成績の向上と生産基盤の質的改善，あわせて屋久島牛のブランド化による付加価値向上に取り組んだ。

3 活動内容

⑴ 肉用牛の生産基盤確保･育成支援

不妊牛の淘汰・更新を計画的に進めるとともに，生産者の高齢化を踏まえた適正規模の維持に向けた指導を行った。また，DX タグを活用した発情検知やファームノートクラウドによる群管理を導入し，個体情報の見える化を進めることで，地域全体での繁殖成績向上対策を推進した。

さらに，屋久島牛の出荷開始に向けた関係機関との調整と生産現場への支援を行い，繁殖から肥育・出荷までを島内で完結させる一貫生産体制の構築を進めた。

⑵ 屋久島子牛の商品性向上

pp 子牛の商品性向上に向け，ＪＡと連携した飼養管理指導を実施し，哺育期から育成期にかけた管理の徹底を図った。一方，疾病の蔓延や下痢の発生により子牛発育が低下したことから，原因の把握と対策の整理を行い，飼養衛生管理や初期管理の重要性について再確認した。あわせて，次年度に向けた重点指導項目を明確化した。

⑶ 屋久島における自給粗飼料の増加に向けた支援

耕畜連携による粗飼料生産の拡大に取り組み，バレイショ跡地を活用した粗飼料作付面積の増加を図った。また，夏作ではスーダンの多回刈りを実現し，限られた面積の中での粗飼料生産量の向上につなげた。これにより，購入飼料への依存低減と安定的な飼料確保に寄与した。

４ 活動の成果

⑴ 肉用牛の生産基盤確保･育成対策

生産基盤は高齢化と不妊牛淘汰により 477 頭とやや減少したが，計画的な更新により繁殖構造の改善が進んだ。DX タグによる発情検知とファームノートクラウドを活用した群管理の効果により，地域ぐるみで繁殖成績が向上し，分娩間隔は町平均 383 日となり，前年から４日短縮した。

また，屋久島牛の出荷開始により，島内における肉用牛の一貫生産体系が確立され，産地としての基盤強化と付加価値向上につながった。

⑵ 屋久島子牛の商品性向上

子牛の売却頭数は 316 頭と減少した。また，子牛発育成績は，めす 0.988kg／日，去勢 1.099kg／日と前年を下回り，疾病や下痢の影響が確認された。この結果から，哺育期管理の重要性が改めて明確となった。

⑶ 屋久島における自給飼料の増加に向けた支援

耕畜連携によるバレイショ跡地の活用と，夏作スーダンの多回刈りの定着により，粗飼料生産量の増加と安定供給が図られた。島内資源を活用した飼料生産体系の構築が進展した。

５ 今後の課題

屋久島子牛の生産基盤を維持しつつ，畜産 ICT を活用した繁殖成績向上対策の継続と，疾病・下痢対策を中心とした子牛の健全育成指導の徹底。耕畜連携による自給粗飼料生産のさらなる拡大と，屋久島牛のブランド化を活かした情報発信の継続。

６ 担当した普及職員（〇はチーフ）　〇新川

Ⅱ　実証・展示ほ等成績

課題名　生分解マルチを利用したサツマイモ栽培

【成果の要約】
屋久島のサツマイモ栽培においては高齢化や後継者不足が課題となっている。中でも収穫前のマルチ剥ぎ作業が重労働であるという声が生産者からあがっていた。そこで，生分解マルチを活用して焼酎用サツマイモを栽培した結果，通常のプラスチックマルチと同等の生育・収穫量が得られた。

１ 目的

焼酎用サツマイモの生産者が高齢化・後継者不足の状況の中「収穫前のマルチ剥ぎ作業がかなりの重労働である」という意見が情報交換会の中であがった。そこで，生分解マルチを活用した栽培実証を行い，作業省力化を図った。

２ 実証・展示ほの概要

⑴設置場所及び担当農家

屋久島町原地区　焼酎用サツマイモ農家Ａ氏ほ場　20a

⑵設置の概要

ア　実証区

品　種：みちしずく
定植日：令和７年５月５日
収穫日：令和７年 11 月 11 日（定植 197 日後）
施　肥：満作　200kg/10a　からいも配合　50kg/10a
作　付：畝間 120cm　株間 40cm　本数 2,000～2,500 本/10a
マルチ：あいさいマルチ（0.017*120*400）

イ　慣行区

品　種：みちしずく
定植日：令和７年５月５日
収穫日：令和７年 11 月 11 日（定植 197 日後）
施　肥：満作　200kg/10a　からいも配合　50kg/10a
作　付：畝間 120cm　株間 40cm　本数 2,000～2,500 本/10a
マルチ：ＦＣ－５０（0.02*120*400）

⑶調査項目

４月～９月　生育状況及び発病調査（1～2 回/月）
11 月　　収穫調査

３ 調査結果等

⑴生育・発病調査

収穫直前まで病害虫の発生は確認されなかった。また，生分解マルチの地際についても問題なく被覆されていた。

左：生分解マルチ区　中央：プラスチックマルチ区　右：生分解マルチの地際

⑵収量調査

【生分解マルチ区】
- 収穫時には手で簡単に裂ける程度に分解が進んでいた
- 地際にマルチ片が残っているが，ハーベスタでの収穫作業は問題なし

左：生分解マルチ区　　右：プラスチックマルチ区

	１個重(g)	１株当たり個数(個)	単収(kg/10a)
プラスチックマルチ	345	7	4,830
生分解マルチ	355	7	4,970

４ 考察

両区の生育や収量に差がなかったことから，生分解マルチを使用しても問題ないと考えられる。

５ 普及性及び残された課題

生分解マルチ活用推進に向けた価格支援対策

課題名　たんかんの適正着果量の実証（２年目）

【成果の要約】
たんかんで「適正着果量 18 果/㎥」に摘果した樹の翌年の着果状況等を調査したところ、着花量、着果量にバラツキが多かった。着果量は樹勢と樹齢に応じて調整する必要があり、18 果/㎥は目安として活用すべきである。

１ 目的

屋久島におけるたんかんの安定生産の大きな課題に隔年結果がある。収穫時期が遅く樹勢回復期間が短いたんかんでは、これまでも様々な対策に取り組まれてきたが、「最終着果量 18 果/㎥」を指標として着果量を制限することで対策としてきた。令和６年に島内６カ所でモデル樹を設定・実証を行ってきており、本年は同一樹の次年度の生育状況等を調査した。

２　実証内容

（１）内　　容：たんかんの適正着果量の実証
（２）設置場所：管内６ほ場（小島、尾之間、原、麦生、高平、永田）
（３）耕種概要
　ア　対象作物：たんかん　カラタチ台 10～30 年生
　イ　作　　型：露地
（４）調査項目：開花状況、着果量、果実肥大、樹容積

３　調査結果

（１）令和６年産の着果と果実肥大状況

表１　調査樹ごとの樹容積と着果状況（令和６年産）

調査ほ場		樹冠容積				目標着果数（18果/㎥）	実際の着果数	目標に対する着果割合
園主名	地区	南北m	東西m	高さm	㎥	個	個	（%）
A	小島	3.5	2.7	2.4	15.9	286	119	42%
B	尾之間	2.2	2.2	2.0	6.8	122	162	133%
C	原	2.2	2.2	2.2	7.5	134	110	82%
D	麦生	3.0	2.5	2.2	11.6	208	155	75%
E	高平	2.5	2.2	2.0	7.7	139	146	105%
F	永田	2.5	3.0	2.2	11.6	208	199	96%

表２　調査樹ごとの時期別果実肥大状況（令和６年産）

調査ほ場		果実肥大（横径）状況(mm)					
園主名	地区	8月中旬	9月中旬	10月中旬	11月中旬	12月中旬	1月中旬
A	小島	41.7	47.3	57.1	62.4	65.5	65.8
B	尾之間	42.2	51.1	59.0	65.1	64.1	69.4
C	原	42.9	49.6	59.2	65.9	69.3	69.0
D	麦生	48.6	54.6	62.8	66.6	68.0	69.6
E	高平	47.2	51.9	60.1	65.8	69.0	69.1
F	永田	43.5	54.4	62.7	67.6	70.6	69.8

（２）令和７年産の着果と果実肥大状況

表３　調査樹ごとの樹容積と着果状況（令和７年産）

調査ほ場		樹冠容積				目標着果数（18果/㎥）	実際の着果数	目標に対する着果割合
園主名	地区	南北m	東西m	高さm	㎥	個	個	（%）
A	小島	3.9	3.1	2.6	18.9	339	229	67%
B	尾之間	2.1	2.4	2.3	7.9	143	360	252%
C	原	2.1	2.4	2.1	7.4	133	231	173%
D	麦生	3.5	3.2	2.5	16.8	302	—	—
E	高平	2.4	2.4	1.7	6.9	123	91	74%
F	永田	2.3	2.6	2.0	8.4	151	89	59%

※着果調査は１月27日に実施したが，鎌田恒美園はすでに収穫が終わっており調査ができなかった

表４　調査樹ごとの時期別果実肥大状況（令和７年産）

調査ほ場		果実肥大（横径）状況(mm)					
園主名	地区	8月中旬	9月中旬	10月中旬	11月中旬	12月中旬	1月中旬
A	小島	46.5	59.7	68.6	78.4	81.8	83.5
B	尾之間	41.8	54.7	62.9	70.1	72.8	73.7
C	原	42.9	55.4	63.9	72.2	75.5	76.7
D	麦生	45.3	54.9	63.4	70.3	72.1	73.0
E	高平	45.6	56.0	63.4	71.6	74.9	76.4
F	永田	39.4	53.9	62.8	69.4	73.0	74.4

写真１　７年産の着果状況（Ｂ園）

写真２　７年産の着果状況（Ｅ園）

４　考察

令和６年産は夜蛾やヒヨドリの被害により、着果目標に対して実際の着果量が少ない樹が多かった。７年産のＢ園は着花量は少なかったが着果量は多く樹勢も維持できている。Ａ園は昨年産の着果が少なかったが、本年産も少なく果実肥大が進んだ。Ｃ園とＤ園は着果量が多く、一部落葉していることから、次年産の着果は厳しいと予想される。Ｅ園とＦ園は６年産は適正着果量であったが、７年産は少なかった。樹勢や樹齢によって着果量は調整する必要がある。

５　残された課題

樹勢や樹齢に応じた着果量の目安の検討

Ⅲ　参考資料

Ⅲ　参考資料

【令和７年の主要作物生育経過】

果　樹

【ぽんかん】

令和７年産ぽんかんの満開日は、４月 17 日で昨年より２週間遅れた。着花量は中程度であるが、園地ごと、樹ごとに若干ばらつきが見られた。

果実肥大は９月頃までは昨年より大きかったが、生育後期の降雨量が平年より少なかったため後半伸びず平年並みとなった。糖や酸はほぼ平年並みであった。

昨年、発生が多かったヤガ、カメムシ、ヒヨドリなどの被害はほとんどなかった。また、台風の接近もなく風傷果の発生は少なかったが、かいよう病や黒点病の発生は多かった。

10 月の気温が高く昨年産と同様に着色が遅れ、本年産のＪＡ出荷割合は、12 月上旬 20%、中旬 35%、下旬 35%、１月 10%となり例年より遅れた。出荷量は約 113ｔで昨年の２倍となったが、販売単価は 385 円/kg で昨年の 75%であった。

ぽんかんの果実横径の推移

調査時期	Ｒ７	Ｒ６	R2～R6平均
8月中旬	43.3	42.8	41.4
9月中旬	54.2	53.1	50.9
10月中旬	63.5	65.0	61.4
11月中旬	71.4	74.0	70.9
12月上旬	73.0		

ぽんかんの年産別果実品質の推移

	Ｒ７		Ｒ６		平年	
調査時期	糖度	酸	糖度	酸	糖度	酸
9月中旬	8.7	2.98			8.9	3.41
10月中旬	9.2	1.33	9.2	1.43	9.3	1.75
11月中旬	9.7	0.77	9.7	0.67	10.1	0.90
12月上旬	10.1	0.65				

【たんかん】

令和７年産のたんかんの満開日は、４月 12 日で昨年より 11 日遅れた。これは全県的な傾向であり、大島地区ではさらに開花が遅れた。着花量は少なく、園地ごと、樹ごとのばらつきが大きかった。

果実肥大は生育前半は平年より大きかったが、ぽんかんと同様に生育後期の降雨量が少なかったため、平年並みの肥大となった。糖は 11 月頃までは平年並みであったが、気象等の影響により高くなり、昨年より１度程度高くなった。

ぽんかん同様に、ヤガ、カメムシ、ヒヨドリなどの被害はほとんどなかった。また、台風の接近もなく風傷果の発生は少なかったが、サビダニや黒点病の発生は多かった。また、一部の園ではかいよう病、そうか病、赤衣病、カイガラムシ類の発生も見られた。

本来着色の早い T-132 の着色が遅れ、垂水１号と出荷時期は変わらなかった。

たんかんの果実横径の推移

調査時期	Ｒ７	Ｒ６	R2～R6平均
8月中旬	42.5	42.4	41.7
9月中旬	53.1	52.3	50.9
10月中旬	61.1	61.0	58.8
11月中旬	68.0	67.3	65.9
12月中旬	69.9	70.0	69.2
１月中旬	70.8	70.0	70.0
２月上旬	71.1		

たんかんの年産別果実品質の推移

	Ｒ７		Ｒ６		平年	
調査時期	糖度	酸	糖度	酸	糖度	酸
9月中旬	7.4	3.02			7.3	4.79
10月中旬	7.7	2.57	7.9	2.08	7.6	2.92
11月中旬	8.4	1.35	8.0	1.31	8.3	1.66
12月中旬	10.3	1.06	8.7	0.78	9.4	1.17
１月中旬	11.2	0.88	10.1	0.58	10.5	0.96
２月上旬	11.7	0.94				

茶

令和７年産一番茶は、昨年夏場の高温干ばつ、秋期高温による再萌芽、３月以降の朝晩の冷え込み、４月中旬の強風など気象の影響を受け、早生品種を中心に新芽生育が緩慢となり、被覆期間や摘採時期の判定に苦慮した年となり、摘採開始は昨年より２日遅い４月１日となった。摘採開始以降、気温は平年より低めに推移したことから、急激な芽伸びは見られず、当初は減収傾向でしたが、気温上昇とともに順調な生産がなされました。県茶市場においては、有機ＪＡＳ認証及びドリンク原料葉の番茶の取引が高値で推移した。

二番茶は、一番茶摘採後の朝夕が冷え込んだことより、芽の生育が遅れ、昨年より５～７日程度遅い摘採となった。ウンカの被害が多く見られ収量の減少する圃場も見られた。二番茶後は、来年の一番茶を見据えた､樹勢のある茶園づくりのため深刈り更新を実施した生産者が多かった。

二番茶以降は、ドリンク原料の需要の高まりから荒茶価格が高騰し、秋冬番茶においては過去最高の単価であった。

野　菜

【ばれいしょ】

北海道の種場産地の不作及びシストセンチュウの被害拡大によって，ニシユタカの北海道種いもは注文量の２割減となった。また，定植時期の降雨・定植後の長期乾燥によって定植遅れと出芽不良が見られた。病気の発生等はあまり見られなかったが，長崎種は球数が多く・大玉傾向，北海道種は球数が少なく，大玉傾向であることが確認されていることから，出荷計画量 460ｔを下回る見込みである。

令和７年度産から新品種「しまあかり」の出荷が開始する予定となっており，食味も良好であることから市場での評価に期待されている。

【やまいも】

令和７年度産をもって，シオノギヘルスケアが「屋久とろ」加工事業から撤退することが決定した。これによって屋久島でのやまいも生産面積は減少する見込みである。台風の被害もなかったことから，例年よりも単収は向上した。

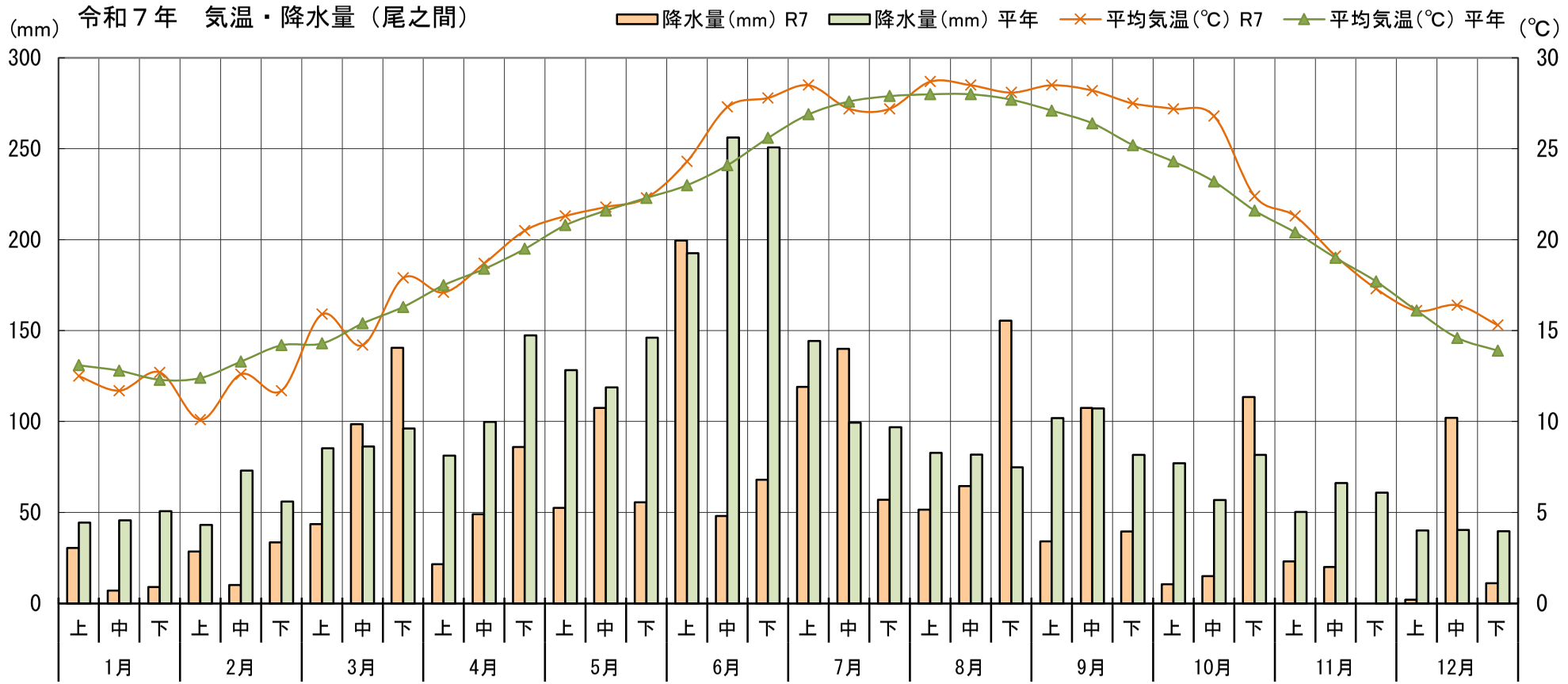
【焼酎用さつまいも】

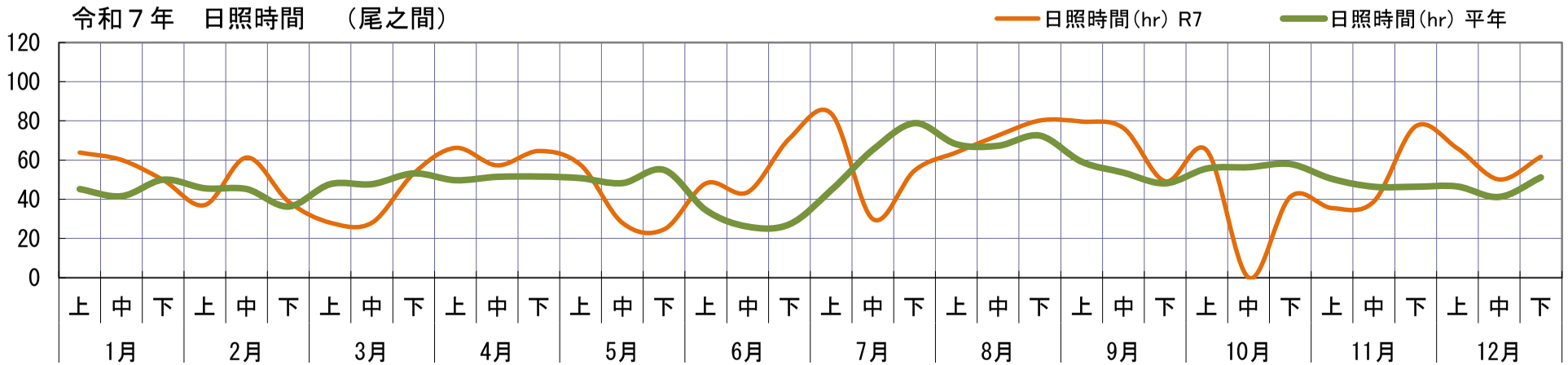
近年，サツマイモ基腐病の発生率が低下したことや酒造会社からの要望もあり，コガネセンガンの栽培を試験的に再開した。しかし，コガネセンガンのほ場でのみサツマイモ基腐病が蔓延したことから，今後は屋久島地域でのコガネセンガンの栽培は行わない方針を決定した。

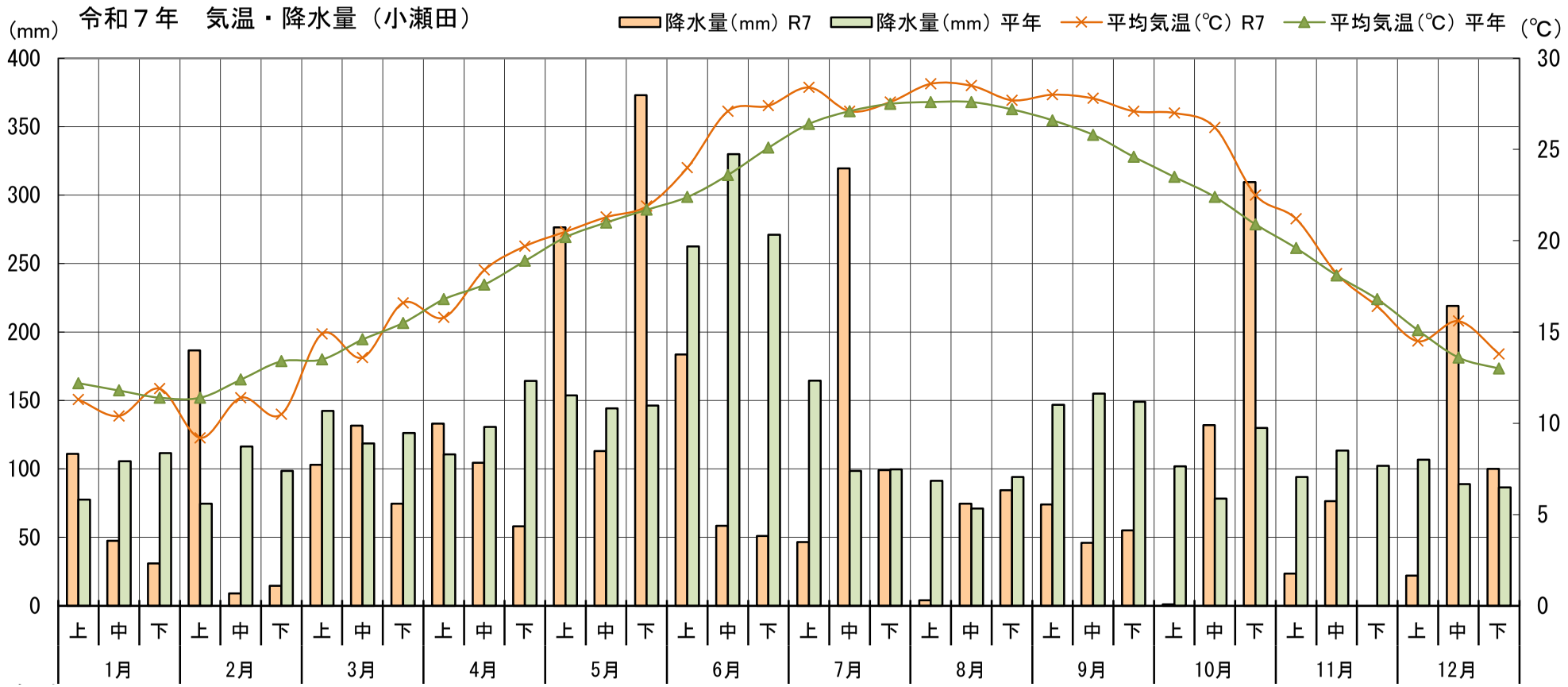
今年度のサツマイモ基腐病及び腐敗病発生割合は 6%となっており，基腐病抵抗性品種の普及や適期防除による効果が認められる。定植後に乾燥が続いたことから根の活着・生育不良が発生したため島内の平均単収は 2.0ｔ/10a となった。

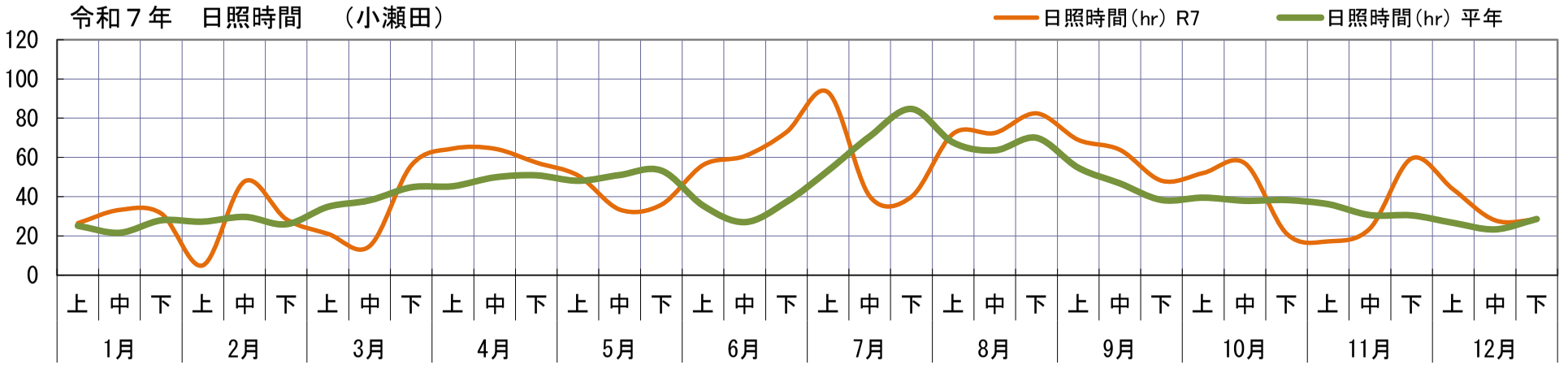
【実えんどう】

害虫被害が例年よりも少なく生育は順調であったが，２月の寒波によって霜鞘などの被害を受けた。出荷計画量３ｔは確保できる見込みである。


令和７年　気温・降水量（尾之間）
(mm)
(℃)
降水量(mm) R7
降水量(mm) 平年
平均気温(℃) R7
平均気温(℃) 平年
300
250
200
150
100
50
0
30
25
20
15
10
5
0
上 中 下
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月

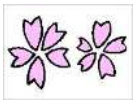

令和７年　日照時間　（尾之間）
日照時間(hr) R7
日照時間(hr) 平年
120
100
80
60
40
20
0
上 中 下
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月


令和７年　気温・降水量（小瀬田）
(mm)
降水量(mm) R7
降水量(mm) 平年
平均気温(℃) R7
平均気温(℃) 平年
(℃)
400
350
300
250
200
150
100
50
0
30
25
20
15
10
5
0
上 中 下
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月


令和７年　日照時間　（小瀬田）
日照時間(hr) R7
日照時間(hr) 平年
120
100
80
60
40
20
0
上 中 下
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月

【ミニ情報でつづるこの１年】

４月



屋久島生まれ，屋久島育ち。「屋久島牛」初出荷

令和７年４月24日，屋久島で育てられた黒毛和牛「屋久島牛」が初めて出荷され，町内の水迫ファーム屋久島牧場において，関係者約30名が出席し，記念セレモニーが実施された。屋久島で生まれ育ち，種子島市場で水迫ファームが導入した屋久島産子牛を，豊かな自然の中で約20か月かけて健康的に肥育したことが特徴。今後はふるさと納税の返礼品としての展開も計画され，屋久島町では税収増が期待される。屋久島事務所では，今後も出荷体制の整備を支援していく方針。

海外を見据えた「屋久島茶」のＰＲ，島民・外国人へ発信！

４月19日，屋久島町安房海岸で屋久島海祭りが開催され，茶業振興会及び関係機関，屋久島高校生徒ら12名で新茶のふるまいを行った。海岸清掃活動やカヌー体験が同時に行われたことから，父兄や子供たち，外国人観光客と幅広い方々に新茶をふるまうことができ，屋久島茶の認知度向上の良い機会となった。また，高校生もお茶の入れ方が上達し，パンフを添えて積極的に屋久島茶をＰＲした。外国人観光客にも好評であった。農業普及係としては，今後も継続した茶ＰＲ活動を支援する。

カンキツ類の開花時期は昨年より遅れる

屋久島地域のたんかんは，昨年４月３日頃が満開であったが，本年産は４月12日で10日程度遅れている。着花量は全体的に少なく，昨年襲来した台風や冬季の寒さの影響等により，同一園地内での開花のばらつきが大きい。ぽんかんも昨年より開花時期が遅れており，４月17日頃となっている。たんかんほどではないが，着花量はやや少なく，ややばらついている。両カンキツとも高樹齢による樹勢低下樹が目立っており，引き続き関係機関と連携して苗木更新を進めていく。

５月

「屋久島茶」の品質向上を目指し，荒茶求評会を開催

５月８日，屋久島事務所で３年ぶりに一番茶荒茶求評会が開催され，茶業振興会員及び関係機関11名で荒茶の評価を行った。求評した荒茶の茶種は煎茶や釜炒り茶19点で，うち９点は有機茶であった。品質は，休眠がしっかりと確保でき，凍霜害等の被害もなくうま味があり良好であった。なかなか他生産者の製造した茶を見る機会もなく，栽培管理や製造法，品質について互いに討論，アドバイスをするなど有意義な求評会となった。今後も「屋久島茶」の品質向上を支援する。

簿記記帳組織「屋久島町アグリネット」総会およびミニ講座を開催

５月15日，「屋久島町アグリネット」（会員数41名）は，総会およびミニ講座を開催し，関係機関を含め27名の参加があった。ミニ講座では，当課より「申告だけの記帳から経営改善へ」と題して，決算書を経営改善に活用するよう促した。総会では，簿記講座，研修会および指導会(決算・申告)が計画された他，ネット環境を整えて確定申告の効率化を図っていくとの説明があった。今年度も関係機関と連携して，経営改善につながる経営支援を継続していく予定である。

バレイショ跡地で粗飼料生産を！

屋久島は雨が多く耕地が少ないため，自給粗飼料の確保が課題である。そこで令和６年度から，限

られた耕地面積を最大活用するため３月に収穫を終えるバレイショ跡地に夏作粗飼料を植える取組を開始した。今年度は協力農家が増え，面積は昨年比４ha 増加した。５月１日に畜産農家と耕種農家が協力しスーダングラスの播種を行い７月末の収穫予定となっている。収穫後は堆肥を散布し，再びバレイショ栽培に供す。今後も耕畜連携での粗飼料確保の取組を継続し面積拡大を図る。

６月

令和６年度花き部会視察研修

令和７年５月 27 日に，花き部会員２名と関係機関２名の合計４名で種子島にて視察研修を行った。レザー・ロベ・ヒサカキ，それぞれの生産者との意見交換や栽培ほ場視察などを通じて，栽培に関する有意義な情報を得ることができた。特に，露地栽培が可能で需要も高い，ロベやヒサカキについては屋久島での栽培が可能ではないかという意見もあったが，出荷体制が整っていないため，今後に向けて慎重に検討していく必要がある。

７月

ドラゴンフルーツの導入に向けて検討中

７月９～11 日に，管内のたんかんを栽培する若手農家が沖縄のピタヤ(ドラゴンフルーツ)を視察した。夏場の新たな収入源を検討しており，比較的手がかからない作物を選定中で，ピタヤはその最有力候補である。沖縄では２戸の栽培農家と農業大学校を視察し，整枝法，施肥，品種など丁寧に説明していただき，内容の濃い研修となった。今後も情報収集や試作を重ねながら，栽培適地性，経済性などを考慮し，導入するかどうか検討していく。

屋久島牛のふるさと納税出品が始まる

令和７年５月に初出荷を迎えた，屋久島生まれ，屋久島育ちの新ブランド牛「屋久島牛」が，７月１日から屋久島町のふるさと納税品目に追加された。町ではふるさと納税の新たな主力として期待しているほか，屋久島牛を含めた屋久島産農産物ＰＲ事業で，YOUTUBE を活用して PR を行う予定としている。農林普及課は，今後も屋久島牛の安定出荷へ向け，子牛の生産基盤の確保と生産者育成に今後も取り組んでいく。

８月

令和７年度屋久島畜産共進会の開催

８月６日，屋久島町営旭牧場において第８回となる屋久島畜産共進会が開催された。第１区では岩川義成さんのあゆむ号，第２区では西橋産業（株）のやくせき号が１席となった。９月６日に開催される郡の共進会出品牛として，１区と２区の各２席までが選定され，グランドチャンピオンには１区の１席が選ばれた。屋久島は生産者は少ないが，出品牛は全て発育良好で資質に富んだ牛が出品された。郡の共進会においても好成績が期待される。

プロジェクト発表で意見が飛び交う，屋久島地区青年農業者会議

８月 25 日に屋久島町営農支援センターで，令和７年度屋久島地区青年農業者会議が開催された。青年クラブ員や指導農業士，関係機関など 22 名が参加し，ばれいしょ栽培での基肥比較試験とピタヤ栽培の共同プロジェクトが発表された。両方の発表とも質問が多く出され，課題に対する関心の高

さがうかがわれた。指導農業士からは，屋久島農業をこれから支える人材となって欲しいなどの期待の声が寄せられた。同日には農業青年クラブ総会が開催され，新たな体制での活動が始まった。

紅茶・半発酵茶の研修会開催により品質向上への意欲が高まる

８月 22 日，屋久島事務所で紅茶・半発酵茶の研修会が開催され，茶業振興会員及び関係機関 14 名が参加した。本町は，７工場中６工場が紅茶や烏龍茶を生産し販売まで行い，生産量は拡大している。農業普及係から製造ポイントを説明した後，各自が生産した茶を求評し，萎凋，発酵法等について意見交換を行った。香気が強く，味が濃く，水色の赤銅色で品質の高い紅茶も見られ，参加者の見本になるなど生産者の意欲も高まった。今後も屋久島茶の紅茶・半発酵茶の品質向上を支援する。

経営発展研修会の開催

８月 25 日，屋久島経営者クラブと屋久島事務所主催の経営発展研修会を認定農業者や新規就農者，関係機関を対象に屋久島町営農支援センターにて開催し，26 名が参加した。かごしま農業経営・就農支援センターから派遣された鹿児島県よろず支援拠点コーディネーターの田口健太郎氏による講演があった。講演では、セルフブランディングの術について、豊富な体験事例を交えて分かりやすく説明をいただいた。今後も稼ぐ力を養える研修を企画していきたい。

９月

屋久島牛のプロモーション動画公開

９月１日，屋久島町と熊毛支庁屋久島事務所が協力して作成した屋久島牛のプロモーション動画が公開された。屋久島牛は令和７年５月に初出荷し，７月からはふるさと納税の返礼品に採用されている。出荷は月 15 頭程度と少ないが，希少性と高品質を兼ね備えた黒毛和牛として注目され，地域振興とブランド価値向上に資する取組として期待されている。県としてもブランド推進の一環として，生産者への技術・経営指導を引き続き行っていく。

ピタヤ（ドラゴンフルーツ）の試食会で市場性を確かめる

９月 17 日，屋久島町営農支援センターにてピタヤの試食会が開催された。希少フルーツポテンシャル向上支援事業での活動の一環で，主催者である屋久島の若手果樹生産者で組織するＡＣＣＹ（アーシー）と関係機関を含めて８人が参加した。島内５カ所，島外４カ所の果実の果実重，果径，果肉色，糖度などのほか，食味調査（甘味，味の濃さ，硬さ，のどごし等）も行った。食味調査の結果は個人間で若干ばらついたものの，評価が高かったのは島内産の白肉系と島外産の赤肉系であった。

20 年後を見据えた屋久島の果樹農業を語る会を開催

９月 26 日，現地就農トレーナー研修として「屋久島果樹農業を語る会」を屋久島町営農支援センターで開催した。会では青年農業者 14 人と指導農業士，関係機関など 25 人が参加した。最初に屋久島町尾之間果樹試験園で園地の視察を行い，室内研修会では屋久島果樹の推移などの説明の後，20 年後の経営目標と課題を青年農業者全員が発表した。経営目標は現状維持の意見が多く，課題としては労働力不足，技術不足（収量・品質の向上）などがだされた。今後，園振協技術部会で意見を分析し，関係機関と今後の方向性を検討していく。

10 月

屋久島からの出品牛，県畜産共進会で最優秀賞を受賞

10 月４日，第 74 回鹿児島県畜産共進会が鹿児島市で開催され，屋久島町から熊毛郡代表として

出品された岩川義成さん（平内）の「あゆむ号」が，若雌１区 17 頭の中で最優秀賞（９席）を受賞した。屋久島からの入賞は平成 30 年以来７年ぶりであり，地域生産者の努力の成果が実を結んだ。今後も屋久島牛の基礎となる育成牛の資質向上を目指し，技術・経営両面からの指導支援を継続していく。

焼酎用サツマイモ目揃い会の開催

９月 30 日と 10 月 10 日に今年度の焼酎用サツマイモ品質について目揃い会を開催した。生産者のほ場を巡回し，出荷するイモの品質について生産者，酒造会社及び関係機関で共有することで，収穫作業の効率化や工場でのサツマイモ原料廃棄率の減少を図ることが目的である。高品質，高単収を目指して指導支援を継続していく。

販路拡大を見据え，クルーズ船への「屋久島茶及び屋久島牛」のＰＲ活動

10 月３日，屋久島町宮之浦港でクルーズ船の乗客を対象に，茶業振興会及び関係機関，屋久島高校生ら約 70 名が連携し，「屋久島茶」の試飲販売及び「屋久島牛」のＰＲを行った。高校生が積極的に外国人を含めた幅広い乗客に，元気よく笑顔でふるまい，ＰＲ効果も高まり「屋久島茶及び牛」の認知度向上を図る良い機会となった。今後も，クルーズ船へのＰＲ活動を続け，輸出等販路拡大につながることを期待している。農業普及係としては，今後も茶及び畜産等のＰＲ活動を支援する。

屋久島食の文化祭を開催

11 月 17 日に屋久島生活研究グループ連絡協議会と屋久島つわぶき会（女性農業者組織）との共催で，屋久島食の文化祭を屋久島営農支援センターにて開催した（参加者 13 名）。地産地消や食育，農産物活用の技術研鑽を目的として，毎年，実施されている。本年は「みんなで楽しく持ち寄り料理で試食会」をテーマしとて，約 20 点が紹介された。このうち，２点が県にレシピを報告し紹介される。今後も農林普及課では，女性農業者組織を支援し，農産物活用等の活動を進めていく。

地域が自らの価値を見つめ直す視点を研修

11 月３日に原地区公民館において東京大学農学部柴崎准教授を講師に招き村づくり講演会が実施された。約 30 名の地域住民参加のもと，従来の自然資源（縄文杉，奥岳等）に依存した観光産業には限界があり，今後は地域にある有形無形の文化や自分たちの価値を見つめ直し，観光客に地域を知ってもらう短期滞在型の観光形態に移行すべきとの講演内容で，地域内の話し合い活動を盛り上げる一助となった。

経営者クラブ奄美大島研修を実施

11 月 19 日から 20 日、屋久島経営者クラブで奄美大島研修を行った。奄美大島の農業生産の実態と優良事例を学び、単収に課題がある屋久島果樹の収量向上につなげることを目的としたものである。果樹試験場ではパッションフルーツやドラゴンフルーツなど夏季新品目の可能性を確認し、続いてタンカン大規模優良経営体２戸で剪定、施肥、樹園管理の取組を研修した。屋久島ではタンカンの単収が課題であるが，収量改善のヒントが得られた。今後は研修を島の果樹振興に生かしていく。

果樹の省力化技術について学ぶ

10 月 30 日，現地就農トレーナー研修の一環で，原園芸組合と共催で果樹省力化技術研修会を原公民館で開催した。出席者は 25 人で定例の栽培講習会の後にパワーポイントにて，低樹高栽培やド

ローンやロボット草刈り機などの機械について説明した。また，軽労化の視点で，アシストスーツや電動ノコも紹介した。果樹は他の部門と比べてスマート農業への取組が遅れており，事例が少なく資料作成に苦労したが，若い青年の出席者が比較的多く，今後の動きに期待したい。

新たな新植，改植が進む中で，果樹の苗木育成を研修

11 月４日，現地就農トレーナー研修として，果樹苗木育成研修会を開催した。参加者は果樹青年農業者のほか指導農業士，関係機関など 12 人が参加した。まず，植栽１年目と３年目の果樹園で園主を交えて管理状況などを検討した。風当たりが強い園では生育が停止している樹があり，防風対策の重要性が認識された。この後，町尾之間試験園にて栽培講習会を行い，半強勢台木での枝の切り方，施肥方法，病害虫防除などを全員で検討した。特に，本年植栽する参加者は参考になったと思う。

12 月

屋久島畜産と林業が連携したおがくず供給体制の整備

屋久島畜産と林業が連携した「おがくず供給体制」が整備され，12 月から運用が開始された。これまで畜産では製材由来のおがくずを利用していたが，製材量の変動により供給が不安定であった。今回，普及からの提案を契機に林業事業体がおがくず製造機を導入し，端材を活用した畜産用おがくずの製造が可能となった。安定供給により，子牛や黒豚の疾病予防と健全な発育が期待され，屋久島畜産の生産性向上につながる。今後も地域循環型農業の確立を進めていく。

出前授業で「水の大切さ」と「お茶の淹れ方」を学ぶ

12 月５日，一湊小学校で４年生の生徒７人を対象に出前授業を行った。内容は農村整備係から「水のはなし」，普及係から「お茶の美味しい淹れ方」を行い，水のはなしでは，水の役割や水の大切さなどを説明し，生徒は興味深く聞いていた。授業後に，クイズ形式で復習し，生徒は水に対する理解を深めた。また，お茶の淹れ方は，生徒が実際にお茶を淹れて試飲した。美味しいと感じた生徒と渋いと感じた生徒が見られたが，初めてお茶を淹れて満足していた。今後も学育教育を支援する。

屋久島牛に続き，屋久島茶のプロモーション動画公開(2 日で 1 万回視聴)

12 月 22 日，屋久島町と熊毛支庁屋久島事務所が協力して作成した屋久島茶のプロモーション動画が屋久島牛に続き公開された。屋久島茶は年間降水量 4,000mm を超える温暖湿潤な気象条件の中，無農薬のお茶が多く生産されている。この豊かな水が美味しい茶葉が育つ環境の一つとも言われ，煎茶や紅茶，釜炒り茶など多種多様な茶づくりが進められている。このビデオが多くの消費者に視聴され，「屋久島茶」の認知度向上につながることを期待する。今後も継続したＰＲ活動を支援する。

原地区ビジョン会議で労働力確保のシステムづくりを検討

12 月 23 日，原公民館でビジョン会議（10 名出席）が実施された。令和２年度から山岳ガイド等を活用した労働力確保のシステムづくりに向けたビジョン会議を積み重ねてきた。これまでの取り組みを振り返り，現状認識の共有を図った。山岳ガイドだけに頼る採用手段にとどまらず、島内・島外の農業未経験者など多様な働き手を巻き込む視点で検討をさらにすすめていく必要がある。今後も関係機関と連携をとりビジョン実現に向けた原地区の支援を行っていく。

１月

屋久島牛，二年連続で分娩間隔の部で表彰

屋久島和牛改良組合は，令和 7 年度全国和牛登録協会主催の認定和牛改良組合表彰（分娩間隔の部）において，前年度に続き全国トップ 15 組合に選ばれ受賞した。本表彰は和牛の繁殖成績に基づき評価されるもので，屋久島の平均分娩間隔は 384 日と前年度（387 日）からさらに短縮し，県平均を上回る水準を維持した。継続的な繁殖管理の改善により，肉用牛繁殖経営の生産性向上と所得安定に寄与する成果となった。今後も基本技術の徹底と ICT を組み合わせて継続指導を行っていく。

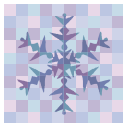
屋久島ぽんかんは厳しい販売結果に終わる

令和７年産のぽんかんの出荷が１月上旬で終わり，ＪＡ種子屋久屋久島支所の販売実績(速報)がまとまった。出荷量は約 113ｔで前年の２倍であったが，販売単価は前年の 75%の 385 円/kg と厳しい結果となった。本年産は秋期の高温により着色が遅れ，価格が比較的高い 12 月上中旬の販売が少なかったことと，後半に計画以上の入荷があり市場価格が値崩れを起こしたことなどが要因の一つと考えられる。販売価格が安かったことから落胆している農家もいるが，次年産に向けた生産対策を指導していく。

現地トレーナー研修（野菜）

令和７年１月 20 日に指導農業士による現地トレーナー研修を開催した。新規就農者２名のバレイショほ場を巡回し，栽培管理や収穫時期，病害虫対策について指導農業士から助言があった。今年度は定植後の乾燥によって初期生育が悪い生産者が多い中，新規就農者２名はスプリンクラーや潅水チューブ等を活用して散水を行ったため，生育は良好である。指導農業士も「これならば，しっかりとした収量が見込めるのではないか」と激励の言葉があった。

２月



祝！青年農業士認定

令和８年２月３日に鹿児島県庁にて農業士認定交付式が開催された。屋久島からは小島地区の酒瀬川涼太さんが新たに青年農業士として認定された。本人から、今後の営農への意気込みとして「ぽんかん・たんかんを主軸として、ばれいしょの栽培も頑張っていきたい」と語っていた。地域の担い手として、今後も大きく活躍できるように屋久島事務所としても支援を継続していく。

初春を彩る「屋久島のたんかん」出荷始まる

本年産の屋久島のたんかんは、ヒヨドリや夜蛾、台風の被害もなく外観は比較的良好である。また、生育後半の降水量が少なかったため、やや酸が高いものの糖度が高く、濃厚な食味に仕上がっている。ＪＡ種子屋久では出荷前協議会を開催し、約 181ｔの出荷を計画している。１月 30 日には町内高平の現地ほ場にて、生産者、関係者など 40 名が参加し、ハサミ入れ式が開催された。年内に出荷されたぽんかんの価格が安かった（385 円/kg、前年比 75%）ことから、生産者のたんかんに対する期待は高まっている。

今年も変わらなく、東京農大生を受け入れています！

令和８年２月３日に鹿児島県庁にて農業士認定交付式が開催された。屋久島からは小島地区の酒瀬川涼太さんが新たに青年農業士として認定された。本人から、今後の営農への意気込みとして「ぽんかん・たんかんを主軸として、ばれいしょの栽培も頑張っていきたい」と語っていた。地域の担い手として、今後も大きく活躍できるように屋久島事務所としても支援を継続していく。

新規就農者に対する巡回指導を実施

令和８年２月９日と 12 日に、新規就農者６人に対し現地ほ場で巡回指導を実施した。巡回指導は屋久島町役場、ＪＡ種子屋久、屋久島事務所農林普及課で構成されたアクションサポートチーム会により実施された。就農状況の確認について、現在の経営状況の把握や今後の予定について聞き取りを行い、今後の対応について助言を行った。一部、栽培技術の習得不足などによる技術的要因により、計画の達成が遅れていることが確認された。新規就農者の経営が早期に安定するよう、今後も関係機関と計画的に支援を行う。

畜産農家の法人化を支援

令和８年２月 10 日、屋久島事務所にて法人化を志向する畜産農家への経営相談対応を実施した。農家の法人化の進め方について検討され、これからの経営目標や法人化に向けた準備・課題を整理した。かごしま農業経営・就農支援センターから派遣された農業経営スペシャリストの税理士から法人化構想に関する聞き取りがあった。また法人化に向けての要点など助言があった。結果、農家の法人化の方向性が明確になった。今後も引き続き、スペシャリストと連携して法人志向農家の目標達成に向け伴走支援していく。

【令和７年度　各種表彰】

表彰者の紹介

(1)　株式会社屋久島黒豚ファームが全国担い手育成総合支援協議会会長賞を受賞

令和７年度の全国優良経営体表彰【技術革新部門】で，省力化と最適規模の運営により効率的かつ持続可能な経営を実施し、全国屈指の経営成績を達成したことが評価され，全国担い手育成総合支援協議会会長賞を受賞しました。「豚一頭一頭丁寧に向き合い、健康的に育てる」ことを基本理念に、家族経営の枠組み内で高度な生産管理技術により、かごしま黒豚の一部一貫経営を行っています。

(2)　県畜産共進会で岩川義成さんの「あゆむ号」が最優秀賞を受賞

10 月４日，第 74 回鹿児島県畜産共進会が鹿児島市で開催され，屋久島町から熊毛郡代表として出品された岩川義成さん（平内）の「あゆむ号」が，若雌１区 17 頭の中で最優秀賞（９席）を受賞しまた。屋久島からの入賞は平成 30 年以来７年ぶりであり，地域生産者の努力の成果が実を結びました。

(3)　屋久島和牛改良組合，二年連続で認定和牛改良組合表彰（分娩間隔の部）で表彰

屋久島和牛改良組合は，令和７年度全国和牛登録協会主催の認定和牛改良組合表彰（分娩間隔の部）において，前年度に続き全国トップ 15 組合に選ばれ受賞しました。本表彰は和牛の繁殖成績に基づき評価されるもので，屋久島の平均分娩間隔は 384 日と前年度（387 日）からさらに短縮し，県平均を上回る水準を維持しました。継続的な繁殖管理の改善により，肉用牛繁殖経営の生産性向上と所得安定に寄与する成果となりました。

(4) 令和７年度普及活動成果発表会で最優秀賞を受賞

令和８年２月３日開催の鹿児島県普及活動成果発表会において、「屋久島畜産の危機を乗り越え未来を開いた普及活動」が最優秀賞（第１位）を受賞しました。町営牧場の指定管理移行と法人育成を軸に、島内一貫体制と屋久島牛ブランド確立までの実践を発表。取組内容と構造的整理、プレゼンカが高く評価され、全国大会への県代表に選出されました。

（5）酒瀬川涼太　さん　青年農業士認定

令和８年２月３日、酒瀬川涼太さんが青年農業士に認定されました。令和６年１月に就農し、「ばれいしょの生産安定技術の検討」を課題に取り組みました。本人から、今後の営農への意気込みとして「ぽんかん・たんかんを主軸として、ばれいしょの栽培も頑張っていきたい」と語っていた。

令和７年度活動体制

熊毛支庁屋久島事務所農林普及課

鹿児島県熊毛郡屋久島町安房 650 番地
ＴＥＬ：0997-46-2236
ＦＡＸ：0997-46-3384

職　　名	氏　名	担　当　業　務
農林普及課長	上村　光秋	課の総括
技術主幹(兼)農業普及係長	樋口　雅彦	係の総括，茶の普及指導，集落営農，有機農業
技術専門員	新川　裕樹	畜産の普及指導，認定農業者の育成，経営，食育・地産地消
技術主査	玉利　信人	果樹の普及指導，青年農業者の育成
技術主査	江口　英雄	経営担当，女性農業者の育成，経営，食育・地産地消
技術主査	佐藤　賀俊	野菜・花・作物の普及指導，新規就農者の育成